
俺とその他大勢の旅館経営記録

カミナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とその他大勢の旅館経営記録

【NZコード】

N2128V

【作者名】

カミナ

【あらすじ】

とある事情で旅館経営！？たくさんの人々といっしょに旅館経営をめざそう！宇宙人、神様、擬人化動物！？そんな人外生物もでてくるよ！

葉「まさか俺危険な目にあつたりしねーよな・・・」

と、ともかくめざそう旅館経営！

葉「どもつてんじやねーか！なあ、ほんとにだいじょうぶなのか！？俺！」

ある朝の風景

春休みの最終日——これから高校2年生になろうとこう俺、深見葉は、「なにかんがえてんだくそおやじ——————！」
とりあえずさけんでました。

事の発端は、親父がこんな手紙を残していったからだ。

「葉へ、母さんといつしょに世界中を旅していく。旅館のほうは頼んだぞ。」

この手紙が朝、リビングに置いてあつた。それを見付けた俺はただ、ひたすらに混乱していた。

「バカか！俺の両親はバカか！だいたい明日から学校が始まるのに学費はどうじろつてんだばかやろ————！」

さらにこんな手紙も落ちてきた。

「P.S 学費はおくつてやるが、生活費は、旅館をつこで稼いでくれ。なんせ旅行費でいっぱいいっぴだ。」

「本格的なばかか！生活費もいつしょにおくつてくれよ！」

俺が一人で騒いでると妹の瀬名が起きてきた。

「兄さん、朝つぱらから何騒いでんですか。うつとうしこ。」

瀬名は寝むそうに目をこすっていた。

「いやお前も見てみろって！そしたら俺の気持ちもわかるからー！」

俺に指示され手紙に目をとおす瀬名。

「ああ、これのことですか、こんなことでいちいち騒ぐんじやありません。」

諭された。これじゃビッちが上かわかったもんじゃないな。．．
じやなくて

「なんでお前反応うすいの！？俺はすぐ混乱しているんだが！？」

「あの親の珍行動なんていつものことでしょ。それに、私はこの

！」としゃべりましたし。

「えつじやあ知らないの俺だけ?」

「そうですね」

「いやなんで俺に知らせてくんねーのー!?」

でした。

「あのバカおやじ…………！」

なんだよあのオヤシ!? セ

「つとせひこ旅館のまじめうらわがはなこりおなこなんてでさないぞー!?

ぞ?
「

七五 有孚惠心勿

「じゃあ、おれはなにをすればいいんだ？」

瀬名は聞くと

と言われた。 とりあえず俺のやることは決まつたな

一 明田の学校の準備があるので、この話はいつたん置きましょう。

史記卷之三十一 仲尼第十一

妹に命令された……でも瀬名の言うとおりだ。なんせおれが通う

学校（瀬名がこれから通う学校でもある）は、なぜかたくさん準備が必要になる。

芸能は、準備だけで一回終了でたな。どうせ今はそれでつぶれるだらうから早めのやつておうか。

俺は、明日からいつまでも心の中で溜息を吐きながら考えていた

ある朝の風景（後書き）

自分にとってこれが初投稿です！
どうか、温かい目で見守ってください。

新学期。新しいクラスメートとなる電波女。（前書き）

それでは、第一話「ついで」。

新学期。新しいクラスメートとあと電波女。

翌日、俺は俺が通っている学校高原学園への道を一人で歩いていた。瀬名は新入生挨拶の事があるといって俺より30分は早く学校へ向かっていった。

「全然ねむれなかつた・・・ま、考へても仕方ないか。それより新しいクラスがどうなつているかのほうが問題だ。またあいつらと一緒になんていやすぎる。」

あいつらといふのは、おれが一年のこり同じクラスだつたやつらの事だ。あいつらは個性的すぎるキャラばかりだつたからな。あいつらと一緒にいると俺がひどく小さく感じてしまう。

俺がそんなことを考へているとどこからか俺を呼ぶ声が聞こえてきた。

「葉ちゃん――ん――ちょっとまつて――――――」

俺が振り向くとそこに去年クラスメイトだった水無月風花がいた。

「えへへ、おはよう葉ちゃん」

「ああ、おはよう。それといつになつたひりちゃん付けをやめてくれるんだ。」

挨拶しながら俺らは通学路を歩いて行つた。

「葉ちゃん、今年も同じクラスになれるといいね。」

「俺は、前のクラスの連中とだけはなりたくない。」

そういうと風花が、ええ、じゃあ私も!?!、と驚いていたが無視することにした。

「そういう私たちの学年に転入生がくるらしいよ。」

「へえ、そうなのか。」

そんなやり取りをしているうちに学校が見えてきた。俺達はさつと中に入り、張り出されているクラス表を眺めていた。

「わあーい葉ちゃんと一緒にだあ!あ、見てみて他にも去年一緒につた子がいるよ。」

テンション高いな風花そんなに知り合いかいるのがうれしかったのか。風花のテンションにおどろきつつ、俺も見てみることにした。

「げつ」

同じクラスのしかもおれと一緒にいたやつらがきれいに一緒にクラスだつた。運が悪いな。これからすげく疲れそうだ。教室に行つてみると、

「あ、葉じやない。あんたもこのクラスなの。」

去年同じクラスだつた相川千尋がいた。

「お前、クラス表見ただろ。その中に俺の名前もあるってことが気付かなかつたのか。」

「自分の名前だけ見てきたからね。」

ほかにも教室内を見渡すと、知つてゐる顔が2つあつた。

「おう、今年もよろしくな。葉」

「また同じクラスだね。よろしく、葉」

上から、木下結城、霧島晴人が話しかけてきた。

「ああお前たちもよろしくな。」

その後、5人で雑談していたりすると、

「席に着けお前らー」

という声がしたので、俺はおとなしく自分の席に着いた。

「俺はお前らの担任の猿山健吾だ。これからよろしく頼む。」

体育会系そうな感じなのに、田だけが完全に死んでいる教師は、さらにこう続けた。

「お前らの中で知つてゐるやつもいると思うが、今日転校生が来る、しかもこのクラスにだ。」

それを聞いたとたん大盛り上がりするクラス。全く、ここは小学校か。隣の結城は、

「俺、美少女なら大歓迎だぜ！先生ーー、その子は女子ですかーー

ーー

なんて質問までしてやがる。さらに、担任が女子だというとかなり盛り上がるクラス一同（の男子たち）。うるさいつたらしかたがな

いぜ。俺？俺は単に盛り上がる元気がないだけだ。

「静かにしろお前ら。ほら、橘入つてこい。」

入ってきたのは、かなりの美少女だった。隣の結城なんざ大盛り上がりしている。

「うるさい！ 橘、自己紹介を頼む。」

担任にそう促され、まわりをきょろきょろと見ていた転入生が口を開いた。

「橘 朱莉。私は宇宙人だから、お前ら地球人は話しかけてくるな。それだけ。」

「・・・・・」

みんな、どう反応していいかわからなくなつてた。風花なんざ口をポカーンと開けてやがる。

橘は、そんなみんなに目もくれず、用意されていた自分の席にスタートと歩いて行つた。

それから、簡単な自己紹介を済ませ、休み時間に入つてた。橘の事（主に容姿と言動）が知れ渡つたのか、二年生はおろか三年生までこのクラスに集まつていた。

結城は橘に話しかけ、拒絶されたそうだった。今その隣で晴人が慰めている。

「しつかし転入生は変な人だと聞いていたけど、まさかあそこまでとはね。」

「千尋、お前転入生のこと知つてたのか。」

「全然。ただ変な人だと聞いていただけ。」

「と次入学式だ。とつとと体育館にいこーと。」

まあ、ちょっとたてば騒ぎも収まるだろ。

登場人物紹介

深見葉くふかみよつゝ
結構有名な旅館の後継ぎ。

容姿は中の上、上の下くらい。黒髪で肩くらいまでの長さ。
両親（特に父親）の珍行動でたびたび被害をつける。

なにげに深見家で一番常識人。

家の女性陣に料理をやらされていたため（旅館の料理も）かなり料理がうまい。

去年生徒会所属。旅館のことがあるので、今年でやめた。

深見瀬名くふかみせな
葉の妹。

モデル並みの容姿で、黒髪のロング。

ゲームおたく。ローブレを好んでやっている。
たまに旅館の出し物でコスプレをしたりする。そのため部屋にコス
プレ衣装が何着がある。

好きなゲームはFF。

料理以外の家事はすべてこなせる。

男女とわずかなりもててている。中学校で毎日一枚ラブレターをもら
つていた。

水無月風花くみなつきふつか
葉の去年のクラスメート。瀬名とも知り合いである。

容姿は寒色系の色の髪で背中くらいまでの長さ。
警察官の娘。のわりのはちょっとぬけている。天然。

告白されたことに気付かないときもある。
たとえ危険な状況にいたとしても説明されなければよく理解できな
い。

そのため父親にスタンガンを持たされている。

現生徒会所属。

相川千尋くあいかわちひろゝ

葉の去年のクラスメート。

容姿は青に近い藍色の髪をサイドテールにしている。

運動神経抜群。だけど運動部には入っていないくて、助つ人として部活動に参加している。

家が和菓子屋。なので和菓子だけ作るのが異様にうまい。

何回か助つ人としていつた部で雑用を葉にやらせていたことがある。結構人気がある。

漫画がかなり好き。（18禁以外だつたらジャンルは問わず）

木下結城くきのしたゆうきゝ

葉の去年のクラスメート。

黒の近い茶髪の癖つ毛頭。

容姿はそれなりにいいのだが、その言動のせいでもてていな。ちなみに、その言動をやめるつもりはないらしい。

風紀委員会所属。

生徒会全校生徒アンケート「もつとも不眞面目な風紀委員」「ぶつちぎり」の第一位。

成績はけつこういいほひである。

霧島晴人くきりしまはるとゝ

葉の去年のクラスメート。

髪は首くらいまでの長さの白に近い銀髪。よく染めていると勘違いされる。地毛。

ゲームおたく。だけど瀬名とは違つたゲームを好む。（詳しく述べ、エロゲー）

学校ではそんなそぶりを一切見せない。

部活には入つていない。アルバイトをしている。

休日にはたまに葉と結城をつれて秋葉原などにいく。

だけど、たまに渋谷などにもいつたりして、結構行動が読めない。

橘朱莉くたちばなあかりゝ

葉のクラスメート。

髪は赤毛の短髪。容姿はそこらのアイドルより上。転入してきてすぐの発言でクラスより孤立する。

ただの電波かとおもつたら実は本物の宇宙人。

ただかなり人間らしいので、はたからみればただの電波。成績はかなりいい。毎回学年ベスト5に入る。

登場人物紹介（後書き）

どうでしたか？近日中に第三話を投稿します。

アルバイトを集めました。瀬名（前書き）

かよひとあけてしまいましたが、続きを読む。どうぞ。

アルバイトを集めましょう♪瀬名

入学式はふつうだった。新入生挨拶を瀬名がやっているところから記憶がない。寝落ちしたみたいだ。

教室に戻り、簡単なHRを済ませ、それで今日はお開きになった。教室を出て行こうとすると、また橘見たさに他のクラスや3年生が集まってきた。風花と千尋も見に行つたみたいだな。俺がどうしたら帰れるかと考えていると、晴人に声をかけられた。

「ねえ葉、これから秋葉原に行かない？新作のエロゲーでても、それを買いにいきたいんだよ。」

みんなが橘に夢中で聞いてないからといって教室で堂々とその発言をするか？

「悪いな、今日は用事があるんだ。結城でも連れて行つてやれ。ていうか、結城はどこに行つたんだ？さつきから見当たらないが。俺は断ると同時に結城を生贊にささげた。晴人とどっかに出掛けると、必ずひどい目にあうからな。」

「結城なら、さつき橘さんのとこにいってたよ。」

まじかよ。さつき拒絶されたばかりなのに。よく行けるよな。そんなことを考えていると、その張本人（結城）がこっちにきた。

「結城、どうだつた？橘さんと話せれた？」

「おう…ぱっちりだつたぞ！ちゃんと会話をしたぜ！」

「へえ、どんな？」

晴人が問いかける。

「おれが話しかけて、一度と話しかけてくるなと言われたぜ！」

ああ、だからこいつテンション高いのか。去年もこいつことを言われるとテンション高くして自分の都合のいい方に解釈してたしな。「きつと人前だと恥ずかしいから、人前では一度と話しかけてるな、という意味だつたと俺は推測するんだ。」

「そのとおりだよ結城！やっぱり結城は女心がわかってるね。」

そういうやこんな時こいつも悪乗りしてたな。心の中では絶対に結城の発言を否定しているだろう。ていうか、結城がしたのは会話じゃないだろう。一方的な拒絶だと思う。

「そろそろ俺は帰るぞ。じゃあな。」

晴人と結城にそう告げ、俺はすることにする。大量にいた人も少なくなつてきてるし、一人くらいなら通れるな。

旅館に帰り、裏の普通の家のほうに入る。するといきなり瀬名がでてきて、こう言った。

「アルバイトを集めましょう。」

「・・・意味がわからない。なんていきなりアルバイトなんだ？俺は素朴な疑問を瀬名になげかけた。

「なんていきなりアルバイト集めることになつたんだ？」

瀬名から事情を聞いてまとめてみると、こんな感じだつた。俺達がいな午前中から夕方までの間に客の相手をする人は、父さんが集めておいてくれたみたいだ。

だけど、夕方から夜にかけては誰もいなくて、俺達兄妹だけなんだそうだ。

だからその間に一緒に旅館をやつてくれる人を探している。でもなかなか見つからぬから、アルバイトとして人を雇うこととした。そんな感じだな。・・・瀬名よ、物事を話すときは要點をかいつまんでも話してくれ

「できれば住み込みで働いてくれる人がいいですね。」

「そんな人はなかなかいないと思うぞ。」

「まあ、それは仕方がありません。それより兄さん、このびらを教室に貼つといてください。」

びらを見てみると、アルバイト募集！と書いていて、そこからまた細かいことがいろいろかいてあるようだつた。でも俺はそんなものを見ずに連絡先のところをみていた。

「はあ！？ なんでだ！？ 普通にそこいら辺で配ればいいじゃんか！？」

しかもこのびら俺に訪ねてくるようにかいてるじゃねーか！？」

「それは仕方ありません。私は学校では優等生としていたいですしあつ、安心してください。私もネットゲのほうで宣伝しておきますから。」

「それでもいやだよ！ 進級早々こんなことで有名人になりたくないよー。」

そういうと、瀬名は怖いくらいのニシローロの笑顔でこう言った。

「やりなさい。やらなかつたら・・・オハナシをしますよ！」

「イ、イヒスマムーー！」

「よろしく！」

「、こわい！ 瀬名のオハナシで俺は昔トライウマができたんだよな・・・」

翌日、俺は朝早くに学校にいって、ぜんぶの教室、掲示板にびらを貼られた。

もう、どこにでもなつちまえ。

その日、奇跡的に教師にあのびらが見つからなかつた。怒られる覚悟はしてたたけど、やつぱり怒られないのが一番だよな。

俺はやることがなくなつたので、手元にあるびらを読んでいく。アルバイトの人数は制限していない。一人見つかればいいほうだろ。う。なんせ、夕方5時から夜11時30分まで、できれば住み込み、というのが条件だからな。時給は後で瀬名が決めると言つていた。さて、びらには夕方5時まで受け付けと書いたからな。授業が終わるのがだいたい3時くらいだから、ちょっとまたなければいけない。受付場所は俺の教室、2年1組だ。今はもう誰も教室にいない。橘見たさのやつらも、橘が早々に帰つたからもついない。

さて、ひまだな・・・

どうやって退屈をしのいづか考えていると、ふいに教室のドアがピシャリと開いた。

入ってきたのは橘だった。忘れ物でもしたのか、そう思つてみると橘が俺の目の前にきた。

まさか・・・そう思つと、橘がびらをだして「このアルバイト、やりたい。」

そう言つた。

アルバイトを集めましょうひろ瀬名（後書き）

すみません。ちょっと遅くなってしまった。たぶん次もこれくらいの長さだと思います。

ちなみに、このときはまだ旅館経営をしていません。準備期間といつたところでしょうか。

なにはともあれ、またぜひ次話も読んでやってください。

マペラシト、ホリコペラトが並じて右欄（記書モ）

では、スルル

マスコット、おとこペットがはじめての橘

俺は今、自分の家に帰つてこる。橘の面接をするためだ。

リビングでは、瀬名が面接をしてこる。俺は瀬名のけりされた。

ひどい . .

すると、リビングのドアが開いて、満面の笑顔の瀬名がでてきた。

「兄さん、橘さんがね、住み込みでもいこつて言つてました！」

「ふーん . . うてええ！？あんな条件のやつをまじでやるのか！？」

最初は「冗談かと思つてたのに。

「しかもですよ、給料もいらないうつて。」飯や生活の世話をしてくれたらそれでいいつて。

それはこっちにとつての破格の条件だな。橘がいらないうつて言つてから、じつちも無理にあげることもないしな。

「それで、橘はいこつちに住むんだ。」

「今日からです。」

はああ！？いくらなんでも早すぎるだろ！？

「だから兄さん、夕飯の準備をしてください。もつすいこつしたら橘さんもこっちに来ますから。」

しかたねえな。歓迎の意味もこめていこつもみつけようと豪華に作つた。

それから30分後、橘が旅館にやつてきた。俺達は3人で夕食を食べて、それぞれ風呂に入つて寝た。布団に入りながら、そういうや橘今日は瀬名とよくしゃべつていたなとそんなことを考えていろひつに寝てしまつた。

翌日、今日は休みの日だ。起きてキッキンこつき、朝ごはんを作る。橘が部屋から出てきた。一応挨拶はする。

「橘、おはよ。」

「…………おはよー。」「

返してくれたみたいだ。よかつた、結城みたいにならなくて。最後に瀬名がでてきた。

「兄さん、橘さん、おはよーになります。」「

「ああ、おはよー。」「

「…………おはよー。」「

みんなそろつたところで俺の作った朝食を食べる。

「ところで兄さん、橘さん、尋ねたいことがあるんですけど。」「なんだ。」「

俺が聞き返す。

「どうしたら旅館に人が来るようになると思こますか？」「それがわかれば苦労しないだらう。」「

「知るか。」「

「まあ、兄さんはそつ答えると思つてました。橘さん、何かありますか。」「

そう思つながら、最初から俺に聞くな。

「…………マスコットとか？」「

「マスコット？」

俺と瀬名の両名が聞き返す。

「…………マスコットみたいなものがあれば、少しは有名になるとと思う。」「

「や、それです橘さん！マスコットがあればいいんですよー。」「

瀬名がすこし興奮している。まあ、そうなるだろうな。なんせ、こんなまともな意見はぜんぜんでこなかつたんだから。

「兄さん、マスコットを探してきてくださいー。」「

なんで俺なんだ？自分でいけばいいじゃないか。そう俺が言つと

「私は忙しいんです。旅館の整備もしなくちゃいけないし。だから兄さん、橘さんといっしょにいってください。」「

さうと橘も巻き込まれたな。しかたない、いくか。

「マスコットってどんなのがいいんだ？ペットでも飼うのか？」「

「それがいいですね、お金はありますから、ペットショップで選んできてください。」

ペットショップは電車に乗る必要があるな。ならこれを食べたらいくか。

「橘、これを食べたらペットショップにいくぞ。」

そういうと、橘はコクンとうなずいた。

電車の中で、橘が急に言つてきた。

「あなたは、私が最初に言つたことを憶えている?」

「ああ、たしか、自分は宇宙人だとなんとか。」

あれは忘れられないだろう。

「あれは、本当のこと。」

「……頭はだいじょうぶなのか、こいつ。

「証拠を見せる。」

そつ言つて、橘は、頭に手を当てて、何かをつぶやき始めた。

「……何か変わったか?」

「時間を止めた。」

一応確認のため周りを見てみる。おかしい、誰一人動いていない。それどころか、外の景色も動いていない。

「ま、まさか……」

ほんとうに動いていない。つてことは、本当に、橘は宇宙人だつていうのか。

橘を見ると、誇らしげにこっちをみていた。

「信じてくれた?」

信じるしかないだろ、こんなものをみせられたら。

「お前が宇宙人だとして、どうして俺にそれを打ち明けたんだ。」

「クラスでも言つた。でも信じてくれなかつた。それで、みんなに説明するのが面倒になつた。でも、これからいつしょに住む人には言つほうがいいと思った。」

「それだけか……橘、これからは人前であんまり宇宙人とか言わ

ないよ。」「どうな。」

「 橘がどうして、と問い合わせてくる。俺は、信じてもうえないから、と説明した。

本当は、橘がどこかの研究機関や国に追われないようにするためだが。

ペットショップにつけた。わざわざ中に入り、中の動物を見てみることにする。

へえ、結構いろんな動物がいるんだな。

ふと、横の橘を見てみると、楽しそうな表情で動物とふれあつていた。

こいつ、ペットがほしかつただけなんじゃないだろ？

そう思わせるほど橘は嬉しそうな表情をしていた。

「アシカ」がいるのか . . . **葉**（前略）

かよひと遅れたナビゲーション

「橘、どの動物にするんだ?」

俺はそう聞く。早くしないと、昼飯に間に合わなくなってしまう。
それに、こいつずっとここにいるつもりだろ。

「 . . . ここの子がいい。」

そういうて橘がみせてきたのは、真っ白な毛並みの犬だつた。
「体が弱つていて、商品にならないから、ただでくれるつて。」

そう橘が言つ。体が弱いつて、それじゃすぐ死んじまうだろ。
俺がそういうと、橘は、犬の体にさわってなにか唱えはじめた。

「これで、だいじょうぶ。」

まじかよ . . . 橘の手元にいる犬は、死にかけとは思えないほど
元気そうだった。

ペットショップをでた後は、まっすぐに家に帰つた。ただ、ペット
ショップの店員の驚いた表情が忘れられない。

家に着いた。玄関のドアをあけ、中に入る。リビングにいくと、瀬
名がパソコンをしていた。

「お帰りなさい。兄さん、橘さん。マスコットは手に入りましたか

?」

「この子。」

橘が自分の手の中の犬を見せる。

「この子の名前は?」

「 . . . 決めてなかつた。」

名前か . . .まあ、てきとうなのでいいだろ。

「シロとかでいいんじやないか。」

「安易すぎます。もつとマスコットらしいネーミングを」

瀬名にだめだしされた。マスコットらしい名前つてなんだよ。まり

もつじりとかか。

「 . . . ユニコーンは？」

橋が聞く。全身白色で名前がユニコーン、まさかガンダムか？

「ああ、それでいいですよ。」

なんと、認めやがった。瀬名も絶対ガンダムからつけたってわかつてるだろう。

「で、瀬名。お前は何をしてたんだ？」

「旅館のホームページを作つたりしてたんですよ。」

ちゃんとさぼつてないようだな。

「そんなことより、早く昼」はんを作つてくださいよ。」

瀬名に急かされる。昼食は、簡単なものでいいか。

2日後、土日の休みは、ユニ（ユニコーンだと長いから、略称してユニー）がきたこと以外は特になかつた。ユニーは俺によく懐いてくれた。他の一人にも懐いているが、やつぱりおれに一番懐いているだろう。

俺達は今、学校に登校していた。周りの視線が痛い。橋もそうだが、瀬名も結構な美少女だつたりする。橋に勝るとも劣らずつてここだな。

そんな美少女一人といつしょに登校しているのが、さえない俺だから、周囲もそりや嫉妬するわな。

俺が嫉妬の視線に耐えながら、ようやく学校が見えてきた。瀬名は、日直の仕事を忘れていてようで、あわてて走つて行つた。

ふう、これで周りの視線が半分になる、俺ははそう思つていた。

甘かつた . . .

瀬名がいないという事は、俺と橋は一人つきりで登校しているように見える。つまり、

美少女と一人つきり＝嫉妬の対象となつてしまつ。

ということで、さつよりも強い嫉妬の視線に耐えなければいけな

いんだよー。ちくしょー！」

校門前へたどりつく。クラスに入つていくのも怖いな。そう考へて
いると、突然、二つの影が俺達の進む道の前へ立ち塞がつていた。
二つの影の内、比較的太い方がいつた。

「僕たちは橘朱莉ちゃんのファンクラブのもの！貴様、我らがアイ

ドル朱莉ちゃんとの関係をこたえる！…」

俺はまず素直に驚き、そして溜息を吐く。

「まさかファンクラブがあるなんてな…」

横の橘をみると、いつもどおりの無表情だった。

「さあ、早くこたえる！…」

ファンクラブの奴らが催促してくる。「うわうてえ…

「橘は、ただの同居人だ。安心しろ。男女の仲や彼氏彼女の関係で
もない。」

そう答えてやつた。ファンクラブの一人組は、おおお、といつづめ
き声を言いながら二つを向く。

「死にさらせえ！…！」

「なんでだよ！…？」

「だまれ！朱莉ちゃんといつしょに住んでるなど言語道断！…」問答
無用で死刑だあ！…！」

「はあ！？意味わからんねえよ！…？」

とりあえず、殴りかかってきた二人組の内、一人は鳩尾を、もう一
人は股間を蹴つてやつた。

ふう、一件落着。と思っていたら、周囲も不穏な空気になつていく。
まさか、まだファンクラブのやつらがいるのか！？

「橘、いくぞ！」

俺は、話を聞き飛ばしてぼーっとしていた橘の手をとつ、一目散に
駆け出していた。

ゲーム部?なんだそりゃ b y葉(前書き)

投稿が遅れてしましました。すいません。

橘ファンクラブの奴らから逃れてきた俺は、またしてもまずいことになつてしまつた。

状況を説明しよう。

ファンクラブの奴らから逃げてきた俺達は、手を繋いだままクラスに入つてしまつた。

る。

「おー葉ーお前橋さんとどういう関係なんだー？」と答える。

結城と千尋がうるさい。橘の方もけつこう質問されてんな。ほとん
「一等だ二等だいじめ一等だを囁くいふやつ。

「別に何でもねえよ。ただの同居人だ。」

၃၁၁

死ねえ！――――――――――――

うるさい！ 橋さんといっしょに住んでいることが罪なんだ！ 今から橋朱莉ファンクラブ名譽会員のこの俺が肅清してやる！！！」

「 ネットよー葉もなんで橘さんと同棲してゐるのよー」の女たらしーーー！

11

あぶねええ！こいつらセヒラ辺にあるもの見境なく投げてきやがる！よけるので精一杯だ。つていうか、結城名誉会員なんだな、ファンクラブの。

その騒動は結局先生がくるまでずっと続いていた。

その騒動は結局先生がくるまでずっと続いていた。

「部活う？」

「そう、ゲーム部。」

帰りのHRが終わり、とつとと帰るうとしていた俺に晴人がそんなこと言つてきた。

「今ゲーム部人数が僕一人で困つてゐるんだよね。だから葉、入つてくれないかな。」

「別にお前一人でもいいだる。学校で堂々とエロゲーができるんだし。」

「葉、知らなかつたの？この学校の部活つて3人以上いなければ廃部になるんだよ。」

「そうなのか、知らなかつた。」

「で、なんで俺なんだ。ほかの奴らでも誘つてやれ。」

「結城は絶対にさぼるからだめでしょ、千尋も部活の助つ人で忙しいし、風花ちゃんは習い事があるし、消去法で葉しかいなかつたんだよ。」

「そうか、すまんな。俺はダメだ。」

「ええ！そんなまつてよ葉！お願いだからはいつてよ！」

晴人が本気で俺にお願いしてくる。珍しい。それほど切羽詰つてんのか、こいつ。

「わかつたわかつた、だからそんな小動物的な目で俺を見るな。」

「ほんと！？絶対入つてよ葉！」

そう言つて、速効で帰つていつた。まったく、俺が入つたつてどうせ一人なのにな。それともあと一人くらいならあてがあんのかな。

瀬名と橋いつしょに夕飯を食べている時に、そのことを瀬名に話した。だめだろ？と思つていたが、案外あっさりOKをもらつてしまつた。

「瀬名、いいのか？旅館の方はどうするんだ？」

「学校が終わるのがだいたい3時くらいです。そして、私たちが旅館をやりだすのは5時からです。2時間も時間が余りますから、別にいいんです。それにゲーム部には、私も入っていますし。」

驚いた、こいつゲーム部に入っていたのか。俺の知らないところでいろんなことをしてるな。

「で、橋さんはどうします？ゲーム部にはいりますか？はいらないのだったら、家の鍵をわたしますけど。」

「私もはいる」

なんと、橋もはいるんだな。泣きやかになりそうだ。

神様？信じられるかそんなもん♪葉

俺や瀬名や橘がゲーム部に入部して何日か過ぎた後の休日、俺はぼろつぼろにさびれた神社の前にいた。

なぜ俺がこんな薄汚い神社にいるのかと言ひと、瀬名が

「明日から旅館の経営もはじまります。なので、父さんたちがよく行っていた神社に願掛けに行きましょう。」

と言つたからだつた。

「つたく面倒くせえな。なんでこんな朝っぱらからこんなさびれた神社にいなきやいけないんだ。」

そう、今はすごい早朝である。というか、太陽が見えるか見えないかという時間帯なので、多分深夜じやないのだろうか。

「文句をいうんじやありません。今日は旅館の準備で忙しいのですから、こんな時間帯にきてるんじやありませんか。」

そう言われてもなあ、眠いしそれに微妙に寒い。

ふと、橘のほうを見てみる。いつもの無表情だつた。

俺はつれてきたユニーの体を抱くことにする。これだけでも結構あつたまるし。

「兄さん、橘さん、早くお参りをして帰りますよ。」

瀬名に促されて、俺と橘はお参りをして行く。

「ていうか、なんでこの神社なんだ？ちょっと遠くへ行けばもっと立派なのがあつただる。」

「父さん曰く、ここは旅館や宿屋の神様の神社なんですって。私たちにはちょうどいい神社でしょ。」

賽銭箱にお金をいれる。50円でいいか。

そして手を一回たたいてじつくりお願いをする。

（一応、旅館が繁盛するよつ、でいいか。）

お参りが終わつたので、早く帰ることにする。そのとき、神社の中から、どんづつ、という音がした。

「今の音は何なんでしょうか . . . 」

俺も気になる。なんでこんなさびれた神社からあんな音が聞こえるんだ。

いや、別に立派な神社でもあんな音が聞こえたらきにするがな。橘は珍しく驚いていた。こいつでも驚くんだんな。

「新しいエネルギー生命体？私と同じくらいのエネルギーでそれも突然に . . . 」

橘はなにかぶつぶつと言っているようだがよく聞き取れなかつた。

音の正体も気になるし、とりあえず中を覗いてみますか

神社の扉を開け、中に進んでいく。そして最後の扉を開けた時、俺達が見たのは、倒れている少女だった。

その後、俺達はその少女を旅館につれてかえり、介抱していた。

「ううん。」

起きたみたいだ。とりあえずこの子は何者か聞いた方がいいか。

「起きてすぐですみませんが、あなたはどうちらさまですか？なんであんな場所でたおれていたんですか？」

瀬名が聞いてくれた。手間が省ける。

「そ、そっちこそでれじや！余に気安く話しかけるでない！」

「 . . . なんだ、この偉そうな態度は。人がせつかく介抱してやつた」というのに。

「は、早く質問にこたえい！こにはどいじや、お主たちはだれじや！」

「！」

「まずそつから答える。人に名前を尋ねるときは自分から名乗るのが礼儀じゃないのか。」

「ふん！余がお主たちみたいな人間に答えるわけないじやろ！」「おいおい . . . お前も人間だろ。」

「何わけわかんないこといつてんだ。お前だつて人間だろ。」

「余をお主たちみたいなものといつしょにするな！余は由緒正しき碧陽神社の神であるぞ！」

「……わかつた。ちょっと落ち着け。今から病院を紹介してやる。

安心しろ、腕はたしかだぞ。」

「何故かすごくばかにされた気がするのじゃが！？病院などにいかなくても、余はちゃんと元気じや！」

面倒くせえ。とつとと警察にいつて預けてきた方がよくねえか。そう思つていると、橘が俺に反論してきた。

「あながち間違つていない。その子は人間ではないし、私のような宇宙人でもない。」

そう橘が言つてくる。忘れてたが、瀬名も橘の正体を知つている。瀬名だけに隠しておくのも気が引けるしな。

橘が言うんだ。間違いはないだろう。それでも信じれない。というか信じたくない。この田の前にいる偉そうな奴が本当に神様だなんて。

「そこまで言つんだつたら、何か証拠でも見せてみろ。」

俺がそう言つてやる。

「はつ、余をなめるでない！」

そういうつて何か変な光の玉をユニーにぶつけた。

おい……だいじょうぶなのか……。ユニーがわんわん鳴いて、どんどん光の玉に飲み込まれていく。

光が消えた時、髪の毛や肌が病的なまでに真っ白な、素っ裸の少女がでてきた。

俺はあわてて目をそらし、自称神のほうに向く。

自称神は、すぐ偉そうにしていた。

「どうじゃ！ 犬の擬人化じゃぞ！ こんなことができるのは神ぐらいしかいまい！」

つく、認めたくないが仕方がない。こいつを神として認めよう。

「わかつたよ。お前が神だつてのはわかつたから、早くユニーを元に

もどせ。」

そつ促す。なんせあの姿は健全な青少年には目に毒だ。
すると、そいつは、

「うん？ もう元には戻せないぞ。」
笑顔で爆弾発言をいいやがつた。

世界など、滅んでしまへ！』『神姫（前書き）

かなり遅くなってしまったが、どうぞ

世界など、滅んでしまえ！ｂｙ神姫

あの後、爆弾発言をした神様を一発殴つてからその場を瀬名と櫛に任せ、俺は買い物に出かけた。

あの神様はすごい荒れてたな。「余が人間になるなどありえん！なんでじや！」とか結構錯乱してたな。しまいには「余が神でない世界など滅んでしまえ！」とかいつてたな。

ああ、これからどうしようかな、と現実逃避になりかけていると、珍しく風花にあった。

「おお風花、こんな所でなにしてるんだ？」

「スーパーに来ているんだから買い物しかないよ」

とくすくす笑いながら返してくる。

「お前がおつかいだなんて珍しいな。」

「今日はお父さんもお母さんもいないからね。それで何かあるかなつて見に来たんだよ。」

ああ、だからここにいるのか。

「葉ちゃんは朝ごはんの買い出し？一人分にしちゃ量が多い気がするけど。」

「ああ、ちょっとした事情で5人分作らなきゃいけなくなつてな。」

「ふうん、まあがんばりなよ葉ちゃん。」

何を頑張れというのだろう。たまにこいつは意味のわからない発言をするからな。

「じゃあねー」

そいつて風花は駆け出して帰つて行った・・・転ばなきやいいんだがな。

家に帰ってきた。今から朝ごはんを作るのは異様にだるい。だけど作らないと説教されるしなあ、朝からテンションがダダ落ちだ。いや、朝だからか。

玄関を開ける。まず真っ先に田に入ってきたのは、満面の笑みの、浴衣を着たユニー（擬人化）だった。

「おかえりなさい、ご主人さま」
「……やべえすごい可愛い。ご主人さまとか言われたの初めてだし。……当たり前か。

「えーっと、なんでご主人さま？」

「そりやあ私を飼ってくれたんですから」ご主人さまですよ
「……まあいいか。悪い気はしないし。

靴を脱いで玄関に上がる。そこからリビングにいく。

そこには、瀬名と神様（自称）がいた。

「ああ、兄さんおかえりなさい。」

「遅い！とつと朝飯の用意をせい！」

相変わらず偉そうだなこいつ。

「橘は？あいつどこいったんだ？」

「橘さんは用事があるつていつてどこかにいきました。」
話していると、玄関から音がする。

「ただいま。」

橘のご帰還だな。

とりあえず飯を作るか。

それから30分後……

「おいしいです！」ご主人さま！」

「ふ、ふん！及第点といったところじゃな！」

よかつた。一応好評みたいだな。反応が対照的だが。

「そういや、お前たちのことをなんてよんだらいいんだ？」
ずっと疑問に思つてたことを聞く。ユニーはユニーでもいいが神は何と呼べばいいんだろう？

「私はそのままユニーでいいですよ。」

「余は神姫じや。よく覚えておけ。」

「神姫か、よく覚えておこづ。」

「ユニーと神姫さんにも旅館を手伝つてもらひ「」としたんです。猫の手も借りたいほどですか。」

それはいい考えだと思つ。問題はこいつがちゃんと接客できるかだな・・・

「む、お主どうして余をみるのじや！余を信用できぬとこりうのか！」

ああ、信用できない。特にその態度が。

「つていうかお前一応神様なんだろ。旅館に人を集めくらいできんのか。」

「できん！」

言い切りやがつた。

「そんなことができておるなら、余はもつと立派な神社であるわ！一役に立たねえな、こいつ。

朝飯を食べ終わつた俺達は旅館の準備を始めていた。そろそろ旅館を始めないと金がなくなつちまつ。

ユニーと神姫には瀬名が接客のことを教えていた。ユニーはすぐ覚えていつた。意外に神姫もすぐおぼえてたな。腐つても鯛、いや神か。俺は橘に料理を教えている。料理を作れるのが一人もいれば安心できるだる。

橘は宇宙人だけあつてすぐに覚えていった。なにげにこいつら学習能力高いな。

これなら旅館も十分にできるな。旅館経営に向けて、ラストスパートをかけるか。

世界など、滅んでしまえ！』⁶ 神姫（後書き）

「めんなさい…すましく遅れてしましました！それにいつもより短いです。
できることならこれ読んで感想をいただければ幸いです。

本格始動！これが深見温泉だ！（前書き）

すいません！9月はバタバタとしたことが多かったので投稿できませんでした。
これからは頑張っていきたいと思います。

本格始動！これが深見温泉だ！

五月の第一日曜日、俺達は、旅館の最後の準備に取り掛かっていた。

「ああ . . . やつと始まるんだな」

俺は感慨深くそう呟いた。

「ええ、まだ客のめだは立つていませんが、まあ大丈夫でしょう。
「しかし、色んなことがあつたもんだ。まだ開館前だつてのに旅館をする気がなくなるくらいにな . . .」

本当に色々あつた。主に神姫がおこした不祥事だが。

「一度は旅館が物理的に潰れかけてたりもしましたもんね . . .
ユニーの悲しい愚痴が聞こえてくる。全く、もつと早くに開館できたのにあいつのせいだ一週間くらいおくれたしな。

「これ、葉！さぼつてないでとつとと働け！」

今までおきた不祥事の半分以上の原因の奴が俺に向かつて命令してくれる。やれやれ、何様のつもりだあいつは。

「神様じゃ！」

うおつ心を読まれた！？こんな地味なことは本当にスキル高いな、あいつ。

そんなこんなで最後の準備をしていく俺たちだつた。

「 . . . 終わつた」

「ああ、やつとか

俺はため息を吐きながらその場に腰を下ろす。

今は毎の十一時を少し回つたところだ。

「これで明日から会館できますね

「……お腹すいた」

今日は朝から何も食っていない。腹が減るのも当然だらう。

「葉！とつとと昼飯を作らぬか！」

あいつに命令されるのはしゃくだが、仕方がない。俺だつて腹が減つてゐる。

「なにかあるかな……」

冷蔵庫の中はぎりぎり五人分の食材が揃つていた。

「ほいほい」と

俺は空腹のせいか、いつもより調理時間が短くなつていた。早く食いたいからな。

そつしてできた料理をリビングに並べて、俺達は昼飯を食つた。

・・・翌日。

今日は学校を休んでいる。記念すべき一日目だ。今日くらつこは朝から居たつて問題ないだらう。

客は昨日の午後、瀬名が見つけてくれた。・・・ネット経由だが。

それでものよりかはましだらう。三グループほどが来る予定になつてゐる。

全部泊まらずに宴会をしにくる。

しかも一つのグループは昼間つかりやるらしい。暇なんだらうか？ まあいい。俺は宴会で出す料理の仕込みを橘とユニーと一緒にやつている。瀬名はこの旅館のホームページ作りと宣伝をしている。神姫はそれを見学している。

二人とも掃除くらいしてくれたらいいのに。つていつかホームページくらい準備の時に作つておけよ。

とりあえず出すのは魚中心のものが、・・・無難に刺身とかにして

おくか。ついでに寿司をちょっとだけつくりだしゃ十分だろ。ふと、橘とユニーを見てみる。橘は俺と一緒に魚料理をできとつくれと頼んだはずだ。

「……橘、それは何だ」

「……ムニエルと押し寿司」

「和風か洋風かどっちなんだよ……」

橘には和風か洋風どちらかにそろえることを教えた。んでもつてムニエルはあきらめて押し寿司にしてもらつた。俺和風のだつたし。とりあえずムニエルの他に和風のものをつくりでもらつて、それからユニーの方を覗くことにした。

「すごかつた。といふか、悲惨だった。

ユニーには二つ目のグループの要望で肉料理をつくりでもらっていた。それが、何があつたらこういうふうになるんだ。

ユニーのいるところの周辺だけ赤い液体や緑の液体、果ては得体のしれない動く物体まであつた。

それでいて、料理はきちんと完成している。

俺はユニーを正座で座らせ説教を開始した。

「ユニー、どうしたらああなるんだ」

「普通に料理をしていただけですよ」

「だつたら何だよあの戦場は！」

液体はまあいい、いやよくないけど、今はまあいい。

それよりあの動く物体は何だよ！怖いよ！どうした料理つくりで動くものができるんだよ！

「ううう、『ごめんなさい』……」

うう、ユニーが涙目で俯いている。こいつは非が全くないのにすごい罪悪感がある。

「ま、まあこれから直していこうな、」

俺はできるだけユニーを慰めながら説教するのだった。……なにやつてんだ俺。

昼。旅館の玄関が開かれる。瀬名とユニーがお出迎えする。

橋は無愛

想だし、神姫は性格があれだから消去法でこうなった。

俺は一応仕事スマイル100パーセントの顔で挨拶する。

「いらっしゃいませ！」

本格始動！これが深見温泉だ！（後書き）

とりあえず旅館準備は終わりです。次は学校の体育祭編になる予定です。
できることなら感想をください。お待ちしております。

漁夫の利を狙いましょう。瀬名（前書き）

ちょっと遅れたけど、どうぞ

漁夫の利を狙いましょう by 濑名

五月中旬、俺は日課になりつつあるファンクラブの撃退を済ませてから教室に入る。ああ、眠い。旅館業も結構きついんだなあ、なんて思いながら自分の席に座る。すると晴人が急に問い合わせてきた。

「ねえ葉、体育祭は誰と出るの？」

そういうやそろそろ体育祭の時期か、いやだなあ、疲れるの。

「まだ決めてないぞ」

ここでの学校の体育祭についての説明を入れる。

まず、原則として二人から十一人までのチームで組んで出場しなければならない。そして、組む人数によってやる競技が変わる。二人なら二人三脚、十一人ならサッカーという具合だ。

それとは全く関係ないクラスで出場する個人もあるが、これは毎年陸上部や足に自慢のある奴らがでて、レベルがむちゃくちゃ高い。あと細かいのは、野球をするのなら自分のチームには野球部は入れてならないとか、レベルを均一にするような事だ。

最後に、最大の特徴。チーム出場の場合、半分までなら外部からの参加もありという点だ。これは外部との交流が目的とされている。まあ、こんなところだ。

今まで誰に話してたかだつて？もちろん何も知らない橘に向けてだ。

「今年はどうするの？また一緒に私たちと出るの？」

風花の問い合わせに俺は保留という形にしてこの会話を終わらせた。 . .

· · · · · 本音を言えば、そんなに出たくないしな。だつて去年めちゃくちゃきつかつたんだもん。

最後の授業を聞き終え、俺はゲーム部の部室でゲームしてた。夜の旅館まで時間もあるし今日はゆっくりできるな。

「晴人、瀬名はいないのか？」

「さつききて、すぐにどつかいつちやつた。そうそつ伝言、今日は

早く帰つて準備していくください。だつて

瀬名からの命令だ。仕方ねえ？帰るか。

「葉も大変だね、まあ頑張りなよ」

とりあえずカラ元氣で挨拶を返してから、俺は旅館に帰つた。

「いらっしゃいませー」

ユニーの客の出迎える声が聞こえる。

俺は今日泊まる一人の客の夕飯を神姫と一緒に作っていた。

瀬名の宣伝の効果か日に日に何人かは来てくれるといった状況が続いている。

生活もぎりぎり、とはいひながら、放つておいたらかなり悲惨なことになるだろう。

何かいいものはないかな、なんて考えてたら料理を作り終わつた。

「じゃ、神姫、これを部屋に運んどいてな」

「わかったのじゃ」

そうして俺は自分たちの夕飯を作りだす。そういうや橘もいないな。

夕飯を作り終えた直後に、瀬名と橘が帰つてきた。

「どこいってたんだ」

「ちょっと旅館に関する大事な話をしてたんですよ

なんなんだよ、それは。

「それは後で話しますから、とりあえず夕飯にしましょ」

瀬名の言うとおりにして、その大事な話とやらは夕飯の場で聞くこ

とにした。

「で、大事な話ってなんだ?」

「…………体育祭について」

「体育祭が関係あるのか?」

「何で旅館と体育祭が関係あるんだ?」

「単刀直入にいいますと、チームを組む際にこの五人で組んで旅館のことをアピールしましょ!つとつことです。チーム名はわかりやすいように深見温泉で」

ええと、つまり体育祭で旅館の名前のチームで活躍してこのを田立たせようつていうことか。

「ええ、こここの体育祭は珍しいルールなので、見に来る人も多いですし」

そんな簡単にいくもんなのか?そもそも五人でやる競技は目立たないのが多いぞ。

「…………問題ない」

「すでに風花さんや千尋さん、晴人さんに結城さんにも事情を話しました。みんな協力してくれるそうです」

遅いとも思つたらそんなんことしたのか。そう思つていたら、横の神姫に話しかけられた。

「のう、体育祭ってなんじや?」

そうか、知らなかつたなこいつとユニーは。

俺は神姫とユニーに体育祭のことと事情を話してやる。すると

「面白そりゃ! 余は参加するぞ!」

「私もできる限りはやつてみたいと思ひます」

とても前向きな意見をいただいた。

「九人いますからやるのは野球です。全力でやりますよ!」
おおーと俺以外の声が響く。…………やうなきやいけないのかなあ

漁夫の利を狙いましょう！瀬名（後書き）

サブタイトルが思いつきません！なので募集したいと思います。
言わせたいセリフといわせたいキャラを送ってください。
お願いします。

あーーはつはつは。 b γ赤峰生徒会長（前書き）

何気に新キャラが出てきます。今度神姫やユニーをまとめた登場人物紹介をしようと思います。

学校の授業が終わって、普通ならゲーム部で過ごす旅館前の大學生の休憩時間、俺たちは近くの市民グラウンドに来ていた。

瀬名はこれから毎日ここで練習しますよ！とか意気込んでいた。おれにとつちゃ疲れるだけだがな。

「葉！ ちょっとはやる気だしなさいよ！」

千尋からの喝が飛んでくる。しかし仕方がない。めんじくさいのはめんじくさいのだ。

「まずはノックからするだー！」

結城に声で練習が始まる。みんな（風花以外）はたんたんとボールを捕まる。

俺もまあ一応は真面目にはする。

が、途中でだらけてくる。どうもやる気が起きない。そこで、ユニー

から（ある意味）もつともな質問が飛び出してきた。

「い、一塁って何ですか！？ バックホームってなんなんですかー！？」

そういうや、野球のルールを一切説明していなかつたな。そこで俺と風花（ベンチに座っていた）で橘、ユニー、神姫に簡単な野球教室を開く。

べ、別にさぼりたくてやつてるわけじゃないからな！？ 風花一人でも大丈夫なのに無理やり入ったとかそんなんじゃないからな！？

「はーい、みんな注目してくださいー！」

風花の声が響く。橘たちはベンチに座つてなぜかあつた黒板を見ていた。

「簡単なものからいきますねー。まずこれが一塁で・・・」

風花の講義が始まる俺は時々相槌を打つたり、ちょっととした補足を入れる役目だ。

少しだけ、

「ここから辺で一日休憩にしますよー」

風花の間延びした声を聞き、俺たちは休憩に入る。

向こうの練習も終わったようだ。まあ後ちょっとで旅館に戻らないといけないしな。

「葉、聞きたかったんだけど、何でそんなにやる気がないの？」

晴人からの唐突な質問。周りのみんなも、そうじやそうじやー！とか、
・・・・・気になるとか声を上げる。

「まあ何つーか、一番の原因是会長がいることだ

「会長つてあの？」

千尋が尋ねてくる。

「ああ、その会長だ」

「何がそんなに嫌なんだ？あの会長相当美人じゃないか」

「結城、お前はあの人の事を知らないからそんなことが言えるんだ」
全くあの会長のせいでどんだけ俺が苦労したことか。
会長、副会長より俺に仕事を押し付けてきたからな。たびたび会長

と一人つきりで徹夜していたしな。

「でも、まあ葉ちゃん。会長さんが野球するとは限らないでしきつ
だが、胸のあたりがざわめく。いやな予感がする。

「それより兄さん、早く帰りましょう。間に合わなくなります」

おお、もつそんな時間か、俺達は早々に旅館に引き上げるのであつた。

旅館に引き上げる途中、結城たちと別れてから少ししたところで俺は買い物することを思い出し、一人でスーパーに向かっている。まあ買うもののはだいたい決まっているから早く終わりそうだな。スーパーにつき、店内を物色していると、突然後ろから声をかけられた。

「あら、深見葉じゃありませんこと」

「…………このお嬢様的な話し方。そしておれをフルネームで呼ぶ人は一人しかいない。俺は恐る恐る後ろへ振り向く。

「こっちへ向くのが遅いですわよ」

生徒会長、赤峰瑠花その人だった。

「何してるんですか、会長」

「見てわかりませんの、買い物ですわよ」

会長の家はこのスーパーから遠い。そして会長の家からこのスーパーまでコンビニなどは一切ない。

おおかた、両親がどこかへ出かけてて、『飯がなかつたから買い物にきた、あたりだろう。

「それより深見葉、あなた野球で出るらしいですわね」

「…………まづい、いやな予感が現実味を帯びてきた。」

「え、ええ、それが何か？」

「それは奇遇ですわね、実は私たちも出場するんですの。野球で」

いやな予感、的中。

「ちょうどよかつたですわ。貴方、負けたら生徒会へ戻りなさいな」「いやですよ！旅館だけでも手一杯なのに、これ以上生徒会なんてできますか！」

「だめです。これは命令なのですよ、深見葉。もう決定事項なんですか？」

そういうて赤峰生徒会長は過ぎ去つていった。

…………やっぱり、今年の体育祭は疲れそうだ

あーーまつまつま b ￥赤峰生徒会長（後書き）

生徒会の一存のリリシアさんっぽい新キャラでした。では、感想待つてます。

「へりへつ—秘儀消えながら燃える魔球—」b γ結城（前書き）

ではどうやら

「へりえつー秘儀消えながら燃える魔球！b.y結城

練習を始めてから数日、俺たちはポジション決めをしていた。
最低限。ピッチャーとキャッチャーは決めておかないとならないからだ。

「とりあえず、神姫、ユニー、風花は除外の方向だ」
俺の言葉に言われた三人以外がうなずく。その反応が気に入らなかつたのか、神姫が抗議する。

「なんでなのじゃ！」

その言葉に俺は余裕を持つてかえす。

「ルールをよつやく覚えたやつにピッチャーなんてやられやがるか！」

「むうう」

勝った。ユニーもそれで黙ってくれたし、風花は自分の運動能力がわかつているからなにも言わない。

「で、どうやってきめるの？」

「オーディションでいいんじゃないでしょうか」

おお、それは名案だつとか言つて煽る結城。とくにみんな不満もないでのオーディション開催。

「まずはピッチャーからね」

じやんけんで順番を決め、それぞれが投げる。俺は早々にピッチャーを辞退し、いろいろ乗せられキャッチャーをすることになった。

最初は千尋のようだ。

振りかぶつて投げる。 速い。

さすが運動部の助つ人によく呼ばれるやつだ。運動神経がかなり高い。

次は、晴人だつた。

基本文化系の晴人、意外性を見せせず普通の球だつた。

次の瀬名も同じようなかんじの球だつた。

その次、結城だ。

こいつも一応運動神経が高い。

さあ、どんな球を投げるのか。

「しつかりとれよー葉」

「わかつてらあ！」

俺も声をあげてお返しする。

「くらえつー消えながら燃える魔球！」

それは意味がない！と思ひながらその結城いわく「消えながら燃える魔球」をとる姿勢に入る

．．．．．．．．．．いつまでたつてもボールがこない。

ボールは俺のはるか頭上を飛んでいた。

「あれ？」

結城、いくらすごい魔球でも入らなきや意味がないぞ。

結城にせがまれ何球か付き合つ。

どのボールもワンバンしたり横に行つたりする。

野手の時はコントロール抜群だつたのにな．．．。

コントロールが定まらないという理由で結城はピッチャー降板。
最後に繩谷二一は末印数三三。

最後に橋たこいは未知数たな

そんな橋、振りかぶつて思いつきり投げる。

ドバシイ！

音が響く。俺のミットにボールが入った音だ。

その場にいる全員が驚きの表情になる。何でこいつこんなに速いんだ？

その剛速球を投げた本人は普通の顔をしている。
速い球を投げたつていう自覚がないみたいだ。
そこからは満場一致で橘がピッチャーになつた。

俺は父とギヤンチーの娘だ

んだが。・・・・・まじかよ、あの球とるたひに手がめちゃくちゃ痛い

そんな俺の意見なんて誰も聞かず、今日はお開きになつた。

深夜、みんなが寝静まつた頃俺は一人で近所の公園に来ていた。会長から、今夜夜に会えないか、っていうメールがきたからだ。

「遅いですわよ」

そこには、いまだ制服のままの会長がいた。

「今日は何の用ですか、会長」

会長に問いかける。俺だつて眠いのだ。帰つて寝たい。

「簡単な用です。 . . . あなたあつちを裏切つてこいつにきなさい」

「はつ？」

「だからあつちを裏切つてこいつにきなさいと言つてのやつす」

「何考えてんだこの人？」

俺は動く気がないし、そんなことをすれば旅館のアピール作戦も台無しになるんだ。

だれがいくか、そんなもん。

俺はその顔を会長に伝える。

「そんなの冗談ですか」

「 冗談なら言つなよ。」

「これで俺がもしいく、って答えたなら絶対に引き抜くだらあんた。」

「本題はこれです」

会長が見せてきたもの。

それは、何枚かの書類だった。

「それは、最近近くで活動している強姦魔と少女を半ば無理やりに援交させている人物の手がかりですわ」

「会長、なんでこれを俺に？」

会長がなぜこんなものを持つているかっていうのは、会長の両親の兄弟が警察官だからだ。

なぜ俺が知っているかって？普通に教えられたのさ、会長に。

そんなことより、またいやな予感がする。前に会長と会った時に感じたのとは違ったものを。

「実はその一人、わたくしたちの学校の生徒と教師かもしれないのですわ」

ここまで来たら、会長の考えなんてわかる。
いやだなあ、俺と会長の徹夜の原因、ほとんど会長が勝手に事件に首をつこんだからだもんなあ

「正確には強姦魔は生徒、援交を無理やりやらせているのが教師だと思います」

現実逃避をしかけている俺に向かって、会長は言い放つ。

「わたくし一人では限界があります。協力しなさい。必ず犯人を突き止めますわよ」

そう言い放った会長と俺の間を、春とも夏とも言い難い五月特有の生暖かい風が走った。

べりべつー秘儀消えながら燃える魔球ー b y 結城（後書き）

シリアルになってしまった
できる限り頑張りたいです。
読みづらいところがあつたら言つてください。

登場人物紹介2（前書き）

このタイミングでの紹介、どうぞ

神姫＜かみひめ＞

神様。事故でほとんどの力を失う。

その後、ユニを人間にしたため完全に力を無くす。バカ。

容姿は青髪でツインテール。たまにポニー テールになつたりする。

目の色は金。

学習能力は高い。

なので、旅館関係（料理や出迎え、接客など）は完璧である。力がなくなつたのを楽観視している。

プライベートは基本偉そう。

ユニ＜ゆに＞

元犬。神姫に人間にさせられる。

容姿は病的なほど真っ白。眼の色は赤。

日焼けしない体质。

真っ白の髪が肩を少し超すくらいまで長い。

一部分を三つ編みにしている。

ドジっ子。風花と一緒にさせると、必ず何かやらかす。

性格が人懐っこいため接客は完璧。ただ、料理がやばい。

どんな料理でも成功率半々くらい。失敗すれば何かが生まれる。最低真っ黒に焦げたもの。最高で勝手に動く未知の生物が出る。成功しても、その過程中料理に使つたものが溶けたりする。

赤峰瑠花＜あかみねるか＞

生徒会長。えらい金持ちの娘。

容姿は赤に近い色。肌はユニほどではないが白い。眼の色は金。大小関係なくどんな事件でもよく首をを突つ込む。

そしてほとんどの事件を解決した。

葉を助手とすることが多い。

事件を解決するときや集中するときは伊達眼鏡をする。

一度、生徒が被害にあつた詐欺集団を捕まえて、葉と一緒に表彰されたことがある。

よく徹夜する（事件の解決のため）

葉と一緒に生徒会室で徹夜しまくつて、たまにそのまま生徒会室に泊まる。

性格は偉そう。生徒思い。

登場人物紹介2（後書き）

こんな感じでどうでしょ？か。不満や指摘（読みづらいなど）があつたら言ってください。

どうでもいいけど、作者はこの三人を結構気に入っているので、登場回数が多くなると思います。

真実はいつもひとつ！』 晴人（前書き）

サブタイトルが思いつかないので、これからできとうに名言を言わせていくことにします。

真実はいつもひとつ。『晴人

会長に無理やり協力させられてから3日。俺達はみんなグラウンドで練習していた。

「おーし橘、こい！」

今俺は橘のピッティング練習に付き合っていた。橘が投げる。

バシィイ！

そんな音があたりに鳴り響く。

ただ投げただけでこれって・・・

橘はほんとすごいやつです。はい。

他のみんなは守備練習をしている。神姫とユニーもルールを覚えて、ちゃんとできている。

練習はこの上なく順調だった。

練習が終わり、旅館で夕飯を作る。

今日は旅館に誰も来なかつた。

これはマジでやばいな、と考えながらできた夕飯を盛り付け、みんなに差し出す。

それをみんなで食べてから、みんなで部屋に帰る。

そんな感じが最近の俺の生活だった。

・・・・しかし、会長という悪魔（いろんな意味で）のせいでのせいで、俺は疲れた体に鞭打つてまた働かなければいけない。旅館をひつそりと抜け出し、公園に走る。

「遅いですわよ」

あの時と全く同じセリフを、これまた全く同じ服装（要は制服）で

言い放つ会長がいた。

「遅いつたつて待ち合わせの時間にはまだ五分ありますよ」「そんなの関係ありませんわ。私より遅い時間に来るのが悪いのです」「す

す」と理不尽だった

まあそんなのいつものことなのでスルーする。

「今日は何の用ですか、会長。こっちだつて仕事があるんですよ」「そちらの事情などどうでもいいのです。貴方は私の言葉に従つていれば」

「つと用件はですね、そもそも本格的に調べたいので手伝ってなさい」また理不尽な 別にいいが。

それはそつとして、やつぱりやるのか

今でも十分に本格的だろう。会長から聞いた話じゃインターネツトを使って調べていたとか

「そもそも、どうやって調べたらいいんですか」

「簡単です。援交を促している教師はもう見当がつきました。そいつの前をできるだけきつさりの服装で通れば、向こうから声をかけてきますわ」

そんな無茶なしかし会長はやるとこつたら聞かないの仕方なく同意しておく。

「会長別にいいですけど何か護身用の武器へりには持つていてください」

「そんなの言われなくともわかっていますわ。それより明日、服屋に行きますわよ」

別にそこに行くのに俺は関係ないんじや その顔を会長に伝えると、

「男の目線が必要なのです」と言われた。

翌日、俺は朝っぱらから学校を休み（瀬名達には内緒で）一緒にさぼった会長と一緒に服屋に来ていた

「でどんなのがいいんですの」

そんなことを俺に聞かれてもわかるかい。

とりあえず無難なのを勧めておく

そうすると会長に、地味すぎ、という評価をもらつたので却下。

そのままできとうに服屋の中をぶらつぶ

おつ、いいものがあった。

「会長これなんていいんじゃないでしょうかね

俺が進めたのは少しゴスロリみたいな黒くて赤い線がところどころに入っているワンピースだ。

会長はなんか黒いのが似合つ気がするし。

「これですか、少し派手ではないでしょうか？」

「やのくらこでちょうどこいと思ひますよ。それに会長がそれ着るときつと綺麗だと思ひし」

そんなことを言つと会長の顔がみるみる内に真つ赤になつてしまつた。時々ぶつぶつと何かを呟いている。

少しした後会長が

「これに決めましたわ」

と言つて決定。あとなぜかは知らんが俺の勧めた服を何着か買って

買い物が終わつた。

その日の夜、旅館を瀬名達に全面的に任せ、俺は会長が待つて

公園に急いだ。

そこにいたのは、今日俺が勧めたワンピースを着ていて、背中まである赤い髪をポニーtailし、ついでに伊達眼鏡をかけて完全変装

した会長がいた。

不覚にも、見惚れてしまった。それくらい美しかった。

「何を呆けているのですか。早く行きますよ」

変装のため話し方も変えた会長から声がかかる。

とりあえず、返しておく。

「すみません会長。会長があまりに綺麗だったの、見惚れてしまつた」

つとしまつた。見惚れていて、てきとうに返してしまつた。すると、真っ赤な顔の会長が小さく「いきますよ。．．．」といつたので、俺は自分が何を言つたか必死になつて思い出さうとしていた。

そういうば何故会長が変装しているかといふと、同じ高校、それも生徒会長に声をかけるわけがないと思つたからだ。

夜の駅前、俺は会長から離れていく。会長が一人にならないと向こうが声をかけられないからだ。

そうして、少し歩く。もともと人が少ない道。そこにいるといふ。そこで見かけたのは一人の男。

背は高く、顔も整つてゐる。少し変装しているが俺にはわかる。あれはうちの学校の坂本先生だ。

坂本先生は、整つた顔立ちから女子に人気がある。しかし男子には冷たい。しかも俺には特に。

たぶん美少女の橘や風花、瀬名や千尋といふからだろう。

その前を会長が通つて行く。

「ねえそこの君、少し待つてくれないか?」

「よし!食いついた。

「何か用ですか？」

「ちょっとした小遣い稼ぎをしない？」

「小遣い稼ぎどんなのですか？」

「簡単簡単、俺が紹介するおじさんと一緒にホテルでいればいいだけだから」「うう

「そうすれば、そのおじさんがお金をくれる。どうだ、悪くないだろ？」

人はそれを援助交際と呼ぶ。会長も同じことを思つたみたいだつた。

「それは援交というのでは？」

「まあ、そういう言い方もあるかな」

「ならいいです。遠慮しておきます」

そつ言つて行つてしまつ会長の腕を坂本先生がつかむ。せつかくの上玉、逃がさないぜ、とか思つてゐるのだろう。たぶん。

「手を放してください」

「まあ聞けつて、ほらこの小学生の子も最初は嫌がつてたけど今は自分からやるよにもなつたし」

「最初は嫌がつてたのに無理やり援交させるのは犯罪では」

「お前らが言わなきゃいいんだよ」

仮面が外れてくるな。あと少しだ。

「私はいいです。それじゃあ」

「ちつ、聞きわけの悪い奴め。だつたら無理やりせしめやうじやねえか！」

坂本先生が手を振りかぶる。そしてそれを振り下ろす……前に俺がスタンガン（改造）で動きを止める。

「ぎやああああああああああああああ！」

悲鳴がこだまし坂本先生が倒れる。これで動けないはずだ。

「坂本先生、これでおしまいですわ」

「ち、ちくしょう……お、お前たち、は、何者、だ」

「まだ気付かないんですの」

会長が髪を結んでいた簪と伊達眼鏡をはずす。

余談だが、あの簪は俺が会長にあげたやつだ。服屋の帰り、変装用に。

そんなことを考えているうちに会長が動けない坂本先生に向かって言い放つ。

「高原学園生徒会長、赤峰瑠花とその愉快な助手ですわ。覚えておきなさい」

真実はいつもひとつ！ b ソ晴人（後書き）

シリアスの敵一體撃破。と言つてもまだあるんですが。
感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2128v/>

俺とその他大勢の旅館経営記録

2011年11月17日18時41分発行